

一週一夜物語

小栗虫太郎

青空文庫

一、 サヒーブ・オーグリー
大人 O'Grie

僕は、「実話」というのが大の嫌いだから、ここには本当のことを書く。

というものの、どうもこれが難題なので、弱る。作らず、嘘でなく、じっさい僕が聴いた他人の告白なんて——よくよく天邪鬼あまのじやくでないかぎり、いえた芸ではないと思う。

とにかく、これはいわゆる実話ではない。あくまで、僕が経験し、じっさいに聴いた話である。

で、冒頭に、僕の経歴の一部を明らかにする。これまで、経歴不明の神秘性がある——とかなんとか云われるのは心外であつたが、この機に残らずぶちまけてサバサバとしてしまいたい。

それは、中学を出て一年遊び、翌大正八年五月から十一年二月まで、横浜山下町一五二番地、メーナード・エス・ジェソップ商会ドアというのに勤めていた。この店は、ブロンズ扉や、ボード・ジョイントらんまや特殊錠、欄間調整器などの建築金具を輸入し、輸出のほうは、印度、蘭印方面へ日本雜貨を向けていた。もちろん僕は雜貨掛りのほうであつた。

ところが、大正十年十一月九日、年に一度は、顧客廻りに出かけるジェソップ氏の伴をして、はじめて北回帰線を越えカルカッタに上陸した。

インド
印度だ。

頭被、綿布、Maharajah 《マハラジャ》の国だ。僕は、象に乗り蛇スネーク使チャーマーいを見、

Lingam 《リングム》の、散在する印度教寺院を見歩いた。しかし、そのバトナやカルカッタにはなんの物語もない。それから、汽車で南行、中部印度のプーリという町にきてはじめてこの話が起る。

その宿は、ホテル「風ウインドの宮パレス」という洒落しゃれた名であつたが、部屋は、Apadravya

《アパドラヴィヤ》という裏町に向いて汚い。

露台が、重なり合っている狭くるしい通りは、また、更紗さらざや麻布の日覆いでしたの土が見えない。しかし、夜は美しい。更紗を洩れる灯、昼間は気付かなかった露台の影シルエット、絵、パターンやブルマンの喧囂エロクエント・コムマースたる取引は、さながら、往時バグダッドの繁栄そのものである。

平太鼓タム・タムが聴える……。それを子守唄に、寝ればまた「一千一夜物語」を夢みる。バクストの装置デザイン、カルサヴィナが踊るシェヘラザードの陽炎かげろう。まるでそれは、僕がHarou

ロ《ハルーン》al《アル》Raschid《ラシッド》で、ここへ彷徨^{さまよ}い着いたようであつた。

ところが、そうして滞在三日目の夕のことである。

窓からみると、砂堤の蔭に首絞め台のようなものが見える。それが、最初の日から気になつていたので、ジェソップ氏を誘い散歩がてら出かけていった。が、側へゆくと、それは Masula 《マスラ》という名の、車井戸だつたのだ(この Masula 《マスラ》というのは、あるいはこの地方の小舟の名であつたかもしれぬ。いずれにせよ、いまは時経て記憶に定かでなし)。

水牛が、釣瓶繩^{つるべなわ}を引くと、絞め殺されるような音を立てる。陽は落ちんとして、マハナデイ三角洲^{デルタ}はくらい霽^{もや}のしたにあつた。

するとそれから、驟^{たち}をつないであるアカシヤのしたまで来ると、とたんに、そば^{くさむ}の草叢^らがガサガサつと動いた。

(眼鏡蛇^{コブラ}かな?)

それは、慄^ぞつとするのと飛び退くのと、同時だつた。しかしジェソップ氏は、からだをかがめ顔を地にすれすれにして、とおく残光が、黄麻畑の果にただようあたりに透^{すか}した。

間もなく彼は、手の泥を払いながら顫^{ふる}える私をながめ、

「ありや、君、人間の手だよ」

と、嗤^{わら}うのだった。

そこで、^{ミスター・オーグリー}Mr. O-Grie が安堵したことは云うまでもない。

しかしジェソップ氏は、顎を撫でながらじっと考え込んでいる。僕は、その腹芸を怪訝^{けげん}に思い、とにかく、驟を引いてきてお乗んなさいとばかりにすると、

「君、ちよつとあの男を呼んで来てくれんかね」

と云うのだ。

「でも……何ですか？」

私は、なにがなんでも得体が分らないので、躊躇するとジェソップ氏は手をあげ、

「いや君は分らんだろうが、これには理由^{わけ}がある」

と、声を低め、云い訳顔に語りはじめた。

「このね、マハナデイ川の上流には、ダイアモンド鉱地がある。昔とちがって、いまは菱^{ひしやうちく}靡凋落のどん底にあるが、それでも、肉紅玉髓^{カーネリアン}、石榴石^{ガーネット}などに混つてたまたま出るところがある。それもなんだ、藩^{マハラジャ}王の経営だから採取法が古い。警備も、南阿の諸鉱地とは、てんで比較にならんのだ。鉄条網もない。電気柵もない。南阿じゃ、着物を縫目まで

解いて身体検査をするというが、ここじゃそれほどあるまい」

「では、発見した鉋夫が逃げられるじやありませんか」

「そこなんだ。宝石^{いし}が、たまたま出るとそれを持ち逃げして追手を避け避け、外国船に売り込む……。いや、あれがそうだとはい、必ずしも云わんよ。しかし、万事こうしたことは、カン一つだからね」

それが、ジェソップ氏の持つ、最大の悪癖だった。賭けたがること、相場が好き、ボロ株が好き、おまけに、角力^{すもう}が好きで、光風^{てるかぜ}が鼻^{ひいき}根であつた。しかし、それも考えれば理由のないこともない。草叢^{くさむら}という、眼鏡蛇^{コブラ}の通路に這い寝そべっているのは、なんぼなんでも並々のことではないからだ。

やがて僕は、主命もだしがたく、草叢に近寄つていった。そうして、怪人 Ram 《ラム》 Chand 《チャンド》君の出現ということになったのである。

そこで断つておくが、ジェソップ氏は印度語^{インド}が喋^{しゃべ}れない。僕も、Indian 《インディアン》 Press 《プレス》 Reader 《リーダー》の初級^{しゅきゅう}くらいのところ、けだし僕を引つ張り役にしたのも、理由がその辺にあるらしい。が、僕とはいえ……ペラペラやられたら冷汗ものところが、運よく、その青年は正統の英語が喋れた。

かれはすぐ飯を食わすというとだ懶るそうに起きあがり、のそのそと僕のあとを跟ついてきたのである。

それから、僕が日本語でやる生擒いけどりの報告中、チャンドを見るジェソツプ氏の眼に、失望の色が濃くなってきた。

服装なりは汚い、それも泥だらけで芬々ふんぶんたる臭気だ。が、顔は、印度アールヤン族の正系ともいう、どう見ても、サンプルプールあたりからのダイヤモンド鉱夫ではない。しかし、人は見かけによらぬという——おそらくジェソツプ氏の腹も、同じだったろうと思われる。とにかく、チャンドの気品は、絶品というに近かった。たとえば、キツプリングの『Naulakha 《ナウラーカ》』に出てくるラホールの王子——といっても、僕自身には褒ほめ過ぎとは思えない。

しかし、そのチャンドにはなんの用もないのだ。といって、ブラブラさせては不安がるだろうというので、おもにジェソツプ氏の身廻りの用をさせていた。がその間、僕には大命が下っていた。それは、チャンドをそれとなく探ることで、ジェソツプ氏は、またまたダイヤならずば黄玉石トパーズくらいの夢を見ていたらしい。

しかし僕は、いつかチャンドの別の方面に、興味を持つようになった。それは、ジェソ

ツプ氏に対しても決して大人^{サヒーブ}とは云わないこと、印度人が、自らを卑くして駱駝^{らくだ}のように膝を折る、あれがチャンドの雰囲気にはないのだ。

やがて、イギリス嫌いの僕は、この青年が好きになった。実際ジェソツプ氏のような、ズボラで人の良い英人はいないのだから、僕には、クライヴもヘースチングも村井長庵と大差ないのだ。そんなもんだから、チャンド君に打ち込んだせいもあり、今度は彼の健康が氣遣われてきた。

はじめ来たときは、二、三日食わないとこんなかと思つたのが、五日、十日となつても少しも回復しない。

憔悴、脱力、眼に力はなく、氣^け懶^だるげに動いている。僕もしまいには、心配になつてきて、あれこれとなだめすかしては問い訊した結果、ついにある夜口を割らしてしまつたのである。

それは、^{トパーズ}黄玉石でも、^{ダイヤモンド}ダイヤでもなかつた。^{カーマ・ストラ}愛^{カマ・ストラ}経^{カマ・ストラ}の印度、^{シヴァ}※婆^{シヴァ}の破壊をいまだに疑わぬ印度——その板挟みに、哀れやチャンド君はペシャンコにされ、青春の泉を涸^{から}々^かにしてしまったというのである。

この告白は、たぶん情氣と暑さで、諸君を困らしめるにちがいない。それほど、印度も

暑いが、この話もそうである。

二、なぶり 嫩味絶々

(以下、ラム・チャンドの告白)

ミスター・オーグリー
Mr. O-Grie あなたは、紳士にも似ず執拗しつこいですね。さつきは、僕の生家もなにも訊きかないと、約束したくせに……。

だが、教育を受けた、学校だけはお話しましょう。

それは、インド 印度の西北部カシユミールインドの首都、スリナガルにあるブリスコー氏の学校と
いうのです。ここには、印度教徒も回教徒もキリスト教徒も、すべてこの地方の上流の子
弟があつまるのです。

聴いて御覧なさい。Tyndal-Briscoe's School 《ティンダル・ブリスコーズ・スクール》
といえば、たいていのものは知っています。

で、その、教程を終えてから何をしたかというと、まず助教師、そして最近、校主
の知己のヘミングウェイ嬢が、本土から来られたについて案内役となりました。

その、ミス・ロバータ・ヘミングウエーは、財団の有力者である国^{こく}璽^じ尚^{しょう}書^{しよ}の令嬢です。まだ二十二か三くらいでしょう。匂いはいかわりに、清純な線があります。

ところが、方々見歩いてこの町に來たとき、偶然ガンデイの示威運動が起つたのでした。町は、兵士の発砲以来、廢墟のようになりました。雨が降る、汗が蒸し暑さに腐るように匂う——、事の起りはそういう晩だったのです。

そうそう、宿は「神主」^{ラジユラーナ}館でしたよ。そして僕は、そのときヘミングウエー嬢の部屋にいました。外は、ザクザクガチャガチャという音で巡^{じゅん}邏^らが絶えません。しかし僕は、地図を見ながら、南行のスケジュールを組んでいました。と、隣りから、湯のはねる媚^{なま}めかしい音がする。いま、ミス・ヘミングウエーが御入浴中なのです。

するとそこから、

「パドミーニ、パドミーニや」

とお呼びになる声がします。

尻あがりの、声を聴いただけでも一人娘の、びりびり蟲のつよいところが触れてくる。しかし、下婢のパドミーニはここには居りません。私は、なんと入浴中のレディにお答えしていいものかと、惑っているうちに、二度目のお声です。

「パドミーニ、パドミーニはいるんじゃないの、そこに。駄目よ、黙って、拗ねていたつて、ちゃんと分るんだから……」

と、湯の面にぴしやりと何かを叩きつけたらしいのです。

「パドミーニ、パドミーニってば……」

そういつて、ミス・ヘミングウエーはしばらくのあいだ、耳を澄ますようにじっと湯の音をさせませんでした。

「じゃ誰よ、そこにいんのは？ さつきから、かきこそ音をさせていて、給仕？」

「いや、僕です。パドミーニは、さつきからここには居りません」

「ああ、なんだ、チャンドさんか」

しかし私は、爽やかな、処女を粧るさまざまな香りに、こう隣ったことを、たいへん有難く思いました。

とやがて、

「チャンドさん」

と羞らったような声で、

「ちよつと、あんたにお願いがあるんだけど、……実はパドミーニがいないんで、お願い

するんだけど……、そこにある、三角海綿ルーフアをここへ持ってきてくれない？」

とたんに、私は、ぱちぱちつと瞬きました。ゆらゆら、鍵穴を洩れる湯気が、肢体のよ
うに妖しく見えます。

「でも……」と、やつと返辞はしたが、子供のような答えです。すると、ヘミングウェイ嬢は、

「アラ、厭なの。じゃ、何かそこでしてんじゃない？ 抽斗ひきだしや、下着入れを覗いてい
るんだったら、今のうちに蔵しまうことよ……」

やがて私は、パドミーニが出しわすれていた三角スポンジを手に、把手ノッブをやんわりとひ
ねっていました。が、実のところは、動作に現われているような、そんな落着きはないの
です。

（なにを……ミス・ヘミングウェイのこれは、意味するのだろう。処女が、娘の媚態とも
いう羞恥心を捨ててまで、自分に、浴室に入れとは、戯れだけと云えないことだ。）

と、妙な自負心に、私はからだ中浮いてしまったように……ああ、Mr. O'Grise、
嗤わらいますね。が、それも、あなたはミス・ヘミングウェイを知らないからです。

つぶらな瞳ひとみ、弾力のあるふつくらとした頬ほほ、顔もからだも、ほどよく締はまっていて、弾はずみ

だしそうです。

神品ですよ。触れようとしても出来ぬものはことごとく神品です。

私は……だが、いかなる場合でも、ブリスコーの生徒でした。

「じゃ、ここへ置きますから」

「そう。有難う。でも、ちよつとの間なら、ここにいてもいいわ」

私の、そのときの驚きは何ものに例えようもありません。しかし、ミス・ヘミングウェイは、続けさまに云うのです。

「どう私、頭のほうもそう悪かアないでしょう。湯気で、あんたの眼鏡が曇つて、なにも見えないのを知つてゐるんだから。見えて？ ……私が、いま、どんなことをしているか」と、はげしい湯の音がして飛沫しぶきがかかると、淡紅色ときいろの、暈ぼやつとした塊かたまりりが、眼前もくの靄やのなかにあらわれました。

揺れる、くねる。

私は、咽喉のどがからからになつて自分の喘あえぎが、ガンガン鳴る耳のなかへ響いてきます。

「では御ゆるり」

私は、やつと咽喉をうるおし、これだけを云いました。すると、ヘミングウェイ嬢は、

「マア、あんた、あんたは割と世帯染みてんのね」

そう云つて、くすんとお笑いになつたようです。が、その頃から、鏡玉^{レンズ}が室^{へや}の温度に馴れ、やつと靄^はが霽^はれはじめてきました。と、灌水^{シャワー}のひらいた、夕立のような音がする。

それも、湯のほう^{ひね}が捻^{ひね}られて、もうもうと立ち罩^こめてくる。せつかくの、喘ぐような瞬間^{もと}がまた旧^{もと}へ戻つてしまつたのです。

「お気の毒さまね」

ミス・ヘミングウエーが、嘲るように云いました。

「なにがです」

「知つているくせに。……もつと黒檀紳士は、明けつ放しの人かと思つていたわ。つまり、四十碼^{ヤード}スクラムからスリークォーター・パスになつて、それを、私がカットして好蹴^{キック}をタツチに蹴出す。一挙これじゃ、三十碼^{ヤード}挽回^{ひね}ね」

「分りませんね。何です、それは」

「分らないの、マアいいわ。いいから、出てないと水を引つかけるわよ」

私はさんざんに翻弄^{さんざ}され、それでも、若葉^{さや}を嗅ぐような、爽^{さや}けい匂いをつけて戻つてきました。

それから、部屋へ戻って寝台にころがつているうちに私は、四肢五体を揉みほごされるように狂わしくなってきたのです。

（なんのためだ……なんのために僕を浴室なんかへ呼んだのだ？）

それは、あるいはミス・ヘミングウエーの気紛れかもしれないが、いちがいにそう云い切ってしまうには、あまりに、奔騰的だ、噴油だ。鬱積しているものが悶え出ようとしているのか。

（ふむ、よくあることだ。よく、青葉病といって、急に憂鬱になるか、それとも、見境もなく齧^{かじ}りつくような、亢^{ニムフオマニ}進症になるか——。とにかくあれは、殻を割りたくても、割り得ない悩みなんだ。あの娘は、心のなかじや充分熟れ切っている。そこへ、破ろうとしても、させないような潔癖さがあるのだ。そうだ、たしかに処女性の病的なものがある。）

と、決めてしまうのも、独り合点でしょうか。分りません!! ミス・ヘミングウエーと、私とのあいだには人種の壁がある。そしてこれも、一夜のほんの戯れだけでしょうか。

私は、そうして右せんか左せんかと悩み、奇怪な謎を投げかけたヘミングウエー嬢の行為を思いあぐみ惑乱に悶えておりました。

ああ、O'Grie《オーグリー》、あなたは、それからの私をお嗤^{わら}いになるでしょう。暇さ

えあれば、留守を狙ってヘミングウェイ嬢の部屋へ忍び込み、部屋に残っている薫香かおりに鼻をうごめかしたものです。O'Grie All is glowing, burning, trembling.

馬鹿です。しかし天はこの馬鹿に恵み給うたのか、翌日も雨、その次も雨、しかも暴動の気配が絶えず、ときどき銃声がする。風もない、ただ雨が滝のように地を打っている。

ところで、その日からはじまる八日のあいだが、カリの女神を祭る精進日となるのです。

水浴をし、あらゆる慾望を絶ち、子羊を犠牲にする。そしてもって、破壊の女神カリをお慰め申しあげるのです。けれど、いまここでは祭典どころではない。雨に暴動、加えて湯気のようなおそろしい湿気だるです。

しかしそうした時、ごろごろだる懶いままに転がっている姿は、だんだん心も獣のようなそれと同じになるのではないでしょうか。

私も、自分ながら、理性を失わんとしているのが分ります。やがて、暗い空がいつそう暗くなり、雨脚も消え、煮られるような夜となりました。

ところが、その夜ヘミングウェイ嬢に、神経痛の発作が起りました。前年、ポロの競技中落馬が原因で、その後は、暑さ寒さにつれ、右肩が痛むのです。それでパドミーニと交

代に、患部の湿布をかえておりました。甲斐甲斐しく、腕まくりしてギュツとタオルを絞る、すべてが、われながら驚くほどマメだったのです。とその時、通りをザツザツと、靴音でない一群が通つてゆく。

「アツ、あれ、きつと何だわ」

「なるほど」

「あらッ、私まだなんにも云つてないのに……」

私は、ときどき失敗をやつてはぎゅうぎゅうな目に逢わされ、それが久しく外道的な快楽となつてゐるのです。いま私は、右手でタオルを抑えながら、左手は、ミス・ヘミングウェイの莚たばこに灰受けを捧げている。

ああ、いかに場合とはいえブリスコーの生徒が、落ちたにも百面相とはなつたものです。

「ああ、そうか」

私は、ポンと手を打つかわりに灰皿を上げて、静かに莚灰はいを落させる。

「分りましたよ、非常時の馬鹿力というのが、あれほど、お痛みだったのが土民がおおると、瞬間ケロリと忘れてしまう……。いや、気が張つとりますと、感じないのですなア」
「そうかしら」

「処世上、その点には、つとつと考えさせられます」

「じゃ、処生哲学ね」

ミス・ヘミングウエーがクスンと笑いながら、

「あたし、まえにはチャンドさんを、ちがう人かと思ってたわ。口説き上手で、パドミー
二のような娘を悦ばせるかわりに、かならずただじゃ済ませない。よく、世間にあるあの
類型ね？」

「……………」

「ところが」

と、云いながら、ヘミングウエー嬢は痛そうに顔をしかめはじめたのです。けれど、まだそれは忍べぬというほどのものではないらしい。

「ただ、あんたは実にまめだと思う」

「まめですか。僕は」

「そう、ほかに良いところが、きつとあるんだろうと思うわ。だけど、なにしろまめすぎるんでほかが分らなくなるの」

彼女一流の毒舌が、このときはまったく苦痛のなから発せられました。

「パドミーニ、パドミーニを呼んで」

腰の痛みだけは、私にもさすが触らせない……しかしパドミーニは、いつになってもこの室へ戻^{へや}つてこない。

（パドミーニがいない。）

それをさつきから、私はミス・ヘミングウエーに、思い出させまいとしていたのだ。彼女はいまコック部屋にいる。回教徒だから、カーリーさまのこの日にも、なんのお咎めもあるまい。

そしてその間、私が万事取り仕切つてまめまめしく働き、ほとんど、触らんばかりの身近にいる愉悦を、パドミーニがきて妨げられまいとしていたのだ。私は、心のなかで、チエツと舌打ちをしました。ところへ、

「呼んで……、ねえ、早く」

とヘミングウエー嬢が、胸をそらし、苦しそうに呻きはじめました。

「はやく、チャンドさん、引っ張つて来てよう」

「ですが」

さすがに私も狼狽^{うろた}え気味になつて、

「考えてみますと……あれから、もう四、五時間も見えないのですから」

「そう、そう云えば……」

と、痛みを忘れたように、不安気に眼を据え、

「あれ、何時いつだったろう。パドミーニは、食堂から出て、たしか……」

と、だんだん、ミス・ヘミングウェイの顔は羞らったようになり、観念の色がなに事かを決めようとなりました。

とその時、通りのどこかでワアツと喚声があがると、数発の、銃声とともにおそろしい音が部屋に起りました。窓硝子ガラスが木葉微塵こっぱとなり、どこか、蒲団マットのしたからキナ臭い匂いが立ちのぼってきます。

その瞬間、せっかくの機会チャンスがぶち壊れてしまったばかりか、ミス・ヘミングウェイは、恐怖に駆られワアツと泣きながら、地下室の酒倉へ逃げ込んでしまったのです。

つまりこれは、カリの女神の嘉よみし給わなかったことでしょうか。それから、ミス・ヘミングウェイは相変らずの態度で、おお機会チャンスと、叫ばせられたのも何度かありました。が、私には、印度教徒の戒律を思わぬわけには、ゆきません。最初の夜の、神意的破壊的の銃声が、もし啓示としたならばこの次はどうでしょう。

ああ、O'Grie《オーグリー》、煩惱ぼんのうはたけり、信仰は脅かす。精進しょうじん潔斎けつさいのその日に、女人にょにんを得ようとしたのは、返す返すも悲しいめぐり合わせでした。

私はそれから、来る日来る日うつらと送りましたが、しかし、希望はまだ九日目にあります。精進明けの、その日には何事も自由です。そして雨も、その前々夜にはからつと上がり、町にはすでに火薬の匂いもあります。朝の風が、黍畑きびをひたす出水のうえを渡り、湿原で鳴く、印度犀さいの声を手近のように送ってきます。ヘミングウエー嬢は、この朝高台ハイ・パークの遊歩場へゆき、八時頃には、木蔭を縫う馬蹄の響が聴えてきました。

そこで私は、とって降した彼女の手をかるく握りますと、どうでしょう、そのうえにピシりと鞭が降りました。

ああ、私はとたんに自己を失い……思わぬ変り方、あまりな恥辱にそのまま面おもてを伏せ、ホテルには入らず一目散に駆け出しました。

それからの放浪です。

私はつくづく、祭、祭に縛られる印度民族インドが厭になり、と云って、遠い祖先の収穫をいのる声がふり挽もぎろうとしてもどうしても離れないのです。おお、O'Grie《オーグリー》、なに事にも印度民族はこのデイレンマに困くるしめられます。信教と、民族発展とに背反する

ものを持つ……。

おお、O'Grie《オーグリー》、お国へ行きましょう。

しかし私は、聴いているうちにも、ほかの事を考えていた。それは、ミス・ヘミングウェイのことで、ああさせた、Aphrodisiac なものは何事であろうか。近傍の……日天スールヤの堂でも見たのか。そこには、奇矯のかぎりを尽す群神の嬌態がある。それとも、麝香じゃこう、沈香ちんこう、素馨そけいの香りに——熱帯の香気に眩暈を感じたのではないか。

いずれにせよ、八日間精進のことは知っていたにちがいない。そして、雨後の冷気が、ムラ気と火遊びを鎮めるに充分だった——と。

やがて、夜が明けかかり闇が白みはじめたころ、私は、菩提樹の梢をとおして、暁にふるえるユニオン・ジャックの翻翻へんぽんたるを見たのである。印度インドの朝、しかし真実の黎明れいめいには遠い。私はチャンド君の寝顔と見くらべ、そう呟いたのであった。

青空文庫情報

底本：「潜航艇「鷹の城」」現代教養文庫、社会思想社

1977（昭和52）年12月15日初版第1刷発行

底本の親本：「地中海」ラヂオ科学社

1938（昭和13）年9月

初出：「新青年」博文館

1938（昭和13）年8月号

入力：ロクス・ソルス

校正：Juki

2008年10月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一週一夜物語

小栗虫太郎

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>